動物哲学物語

確かなリスの不確かさ

ドリアン助川

集英社
インターナショナル

目次

第1話 クマ少年と眼差し 1
第2話 キツネのお姉さん 15
第3話 確かなリスの不確かさ 29
第4話 ボスも木から落ちる 43
第5話 一本角の選択 57
第6話 コウモリの倒置君 71
第7話 クジラのお母さん 85
第8話 モグラの限界状況 99
第9話 ウリ坊の恥 113
第10話 絶滅危惧種 127
第11話 スローな微笑み 141
第12話 最後の思い出 155
第13話 バクの茫漠たる夢 169
第14話 転がる小さな禅僧 183
第15話 ペロリン君の進化 197
第16話 おじさんにできること 211
第17話 ビクーニャとコンドル 225
第18話 イグアナ会議 239
第19話 ゾウガメの時間 253
第20話 飛べない理由 267
第21話 対話する鳥 281
（あとがきに代えて）

版画　溝上幾久子（みぞかみ・いくこ）

銅版画家。2022年に朝日新聞で連載された多和田葉子の小説『白鶴亮翅』の挿画・装画、2023年にドリアン助川著『寂しさから290円儲ける方法』の装画を担当。著作に絵本『オオカミ県』（文・多和田葉子／画・溝上幾久子）がある。

第1話

クマ少年と眼差し

ツキノワグマ

広くアジア諸地域に分布。日本国内では、本州と四国の33都府県に、のべ2万頭前後が棲息しているとされる。ブナやミズナラなどの照葉樹林に棲み、ドングリの実や若葉など植物を主食とする。オスの頭胴長は130センチ、体重は80キロほど。メスはやや小型で50キロほど。冬眠中に平均で2頭の子を産む。里山や森林で人間が襲われる事故も増えている。2020年度のクマ類の国内捕殺数、608 5頭。

クマは、はっきりとものが見えない。意外にもぼんやりとした世界に棲(す)んでいるのだと主張する学者たちがいます。一方で、なに言ってやがんで、クマは目がいいに決まってんじゃねえかと譲らない人たちもいます。こういう人たちはきっと、森のなかでクマと出くわしたことがあるのです。

みなさん、想像してみてください。

木の葉が赤や黄に染まりだした頃、シチューの具に手頃ないい香りのキノコを求めて山道を歩いていると、近くの暗い茂みからいきなりクマが飛び出してくるのです。

びっくま仰天ですね。

クマももちろん驚いていますから、その目はまん丸に見開かれています。お互いにワアッと声をあげつつ、にらみ合ったり、見つめ合ったり。

するとたいていの人は、黒水晶（モリオン）の玉のようなクマの目に、山のすべてが映っていることに気づくのです。

それは、山が山であるための、山の精気(せいき)をも含めたすべての山の姿です。その山を、自分もまた山の一部となって歩いているわけですから、クマと向かい合った人は心のなかまで見透かされたような気持ちになります。でも、だからといって、クマに背中を見せて逃げてはいけません。

クマは、視界を横切ったり、前方を駆けるものを見つけたりすると、無性に飛びかかりたくなるのです。それが人間であれ、ネコジャラシであれ、動くものを見れば目から吸いこまれるように飛びこんでしまうのです。クマの巨体や獰猛（どうもう）さは、ただ目の勢いについていくだけなのです。だから、クマと出会ってしまったら、向かい合ったままゆっくり後ろにさがっていくか、木陰にでも隠れてじっとしているのが一番なのです。

クマは目がいいのか、わるいのか。

本当のところはだれにもわかりません。クマはまだ一度も視力の検査をしたことがないのですから。どこかの勇敢な目医者さんが、視力検査表の前に立って片目におたまを当てているクマに、「次のひらがなは読めますか？」と聞いてみない限りわからないのです。

さて、ここに一頭のクマの少年がいます。二度目の冬眠から目覚めてしばらくたったツキノワグマの少年です。もう胸には立派な三日月のマークが浮きあがっています。ただ、名前はないので、「クマ少年」と呼ぶことにしますね。

ついこの間まで、クマ少年はお母さんといっしょに、ミズナラの森の暗い穴のなかにいました。巨木が倒れたことで、根が浮きあがってできた穴です。そのなかにさえいれば、降り積もる雪も、氷を飛ばしてくるギンギラ凍（い）てついた風も避けることができました。お母さん

の柔らかなお腹(なか)に頭をのせてうつらうつらしているのは実に気持ちのいいものでした。

でも今、クマ少年は一クマぼっちでした。竹林に入り、お母さんとタケノコを食べていたら、いきなり大きなオスのクマが現れ、クマ少年を殴りつけたのです。クマ少年は転がりました。打たれたところが痛くて泣きました。お母さんに駆け寄りました。オスのクマを追い払ってくれるものだと思ったからです。しかしお母さんは、自分ではなく、オスのクマに寄り添いました。そして、「Adieu（さよなら）」とクマ少年に目で告げたのです。見知らぬオスのクマと並んで竹林を出ていくお母さんの後ろ姿を見ながら、クマ少年は信じられない気持ちでいっぱいになりました。

これが、クマの「子別れ」です。お母さんは新たな繁殖期に入るため、二度の冬眠をともにした子どもと訣別(けつべつ)するのです。自然の掟とはこういうものです。クマ少年はこれから自分の力で生きていかなければならないのです。

クマ少年は、淡い緑色の光に包まれていました。頭上は一面のブナの若葉です。太陽の光が、ブナのすべての若葉に乗っかって、踊ったり跳ねたりしていました。葉っぱという葉っぱが輝き、こぼれ落ちた光たちが、あたりを生まれたての葉のような色に染めていたのです。

ブナの森を抜けていく風は暖かでした。若葉の香りそのものでした。おいしそうなセリ科

の植物の匂いも混じります。きっとお腹がいっぱいになるまで食べられるほどのシシウドの群生がそばにあるのでしょう。お母さんと別れてからずっとお腹を減らしていたクマ少年です。本来なら、銀色のよだれがあふれてもおかしくないほどの風の香りなのです。

でも、クマ少年は、ブナの大木の隆起した根の部分に背を預け、空をじっと見つめていました。

クマ少年の心を最初に捉えたのは、ブナの葉の上の、もっともっとずっと高いところから聞こえてきた、ゴーッという音でした。なんだろうとクマ少年が見上げると、ブナの枝や葉を越して見える青空が、まっすぐに伸びていく一本の白い線によって二つに切られつつあったのです。

大変なことが起きている、とクマ少年は思いました。動くものは目が勝手に追ってしまいますから、その白い線の先端に飛びつきたくてしかたない気分になりました。

いったいあれはなんだ？

あんなに高いところをまっすぐに進んでいく白い線。

はっ！

クマ少年はそのとき、空の青い幕が一枚取れて落ちてきたのではないかと思うほど驚いたのです。胃も心臓もびくんと動きました。瞬間的に、こう気づいたからです。

ぼくは、ぐんぐん伸びていくあの白い線を見ている。

見ている。そう、見ている。

そしてぼくはきっと、見られている！

あの白い線はきっと、ぼくを見下ろしている！

クマ少年の心に突然湧いたこの気づきは、世界にとっての一大事にもなりました。山の時計が一瞬止まったほどです。なぜなら世界とは、クマ少年の認識のすべてだからです。山の時計の秒針は、木の葉の揺らぎや枝を抜ける風の音です。それらがすべて、一度止まってしまったのです。

クマ少年は、自分が空を見ている目であると同時に、空という目から見られていることで「ここに在(あ)るのだ」と感じました。いえ、それは空に留(とど)まらず、この山を成すすべての風景に隠れた原理なのかもしれません。

見ているものは、見られてもいるのです。ブナの木も、シシウドの葉も、ミズナラの実も、クマ少年に見られながら、クマ少年を見ているのです。

ぼくはずっと見られている。その目から逃れられない。ではいったい、ぼくはだれに追いかけられているのだろう？

いてもたってもいられなくなり、クマ少年は駆けだしました。ミズナラの森の穴のように、

だれにも見られない場所を探そうとしたのです。ブナの森を抜け、フキのお化けの帯を越え、クマ少年は走り続けました。一面のササの茂みも転がりながら越えていきました。そこは緩い傾斜地で、でんぐり返りをすればどんどん勢いがついたからです。

しかし、自分を見ている目はずっと追いかけてきました。見られているという感覚は、クマ少年から消えません。

「わっ！」

伐採が進んだ杉林に差しかかったとき、クマ少年は思わず声をあげてしまいました。材木が積まれた斜面の向こうに、初めて見る人間の村があったのです。褐色の農耕地と交わって、色とりどりの家々の屋根がありました。煙突からは紫色の煙が棚引き、舗装された道を鉄の車が走っています。

様々な匂いを含んだ風が人間の村の方から吹いてきました。おいしそうな香りもありますが、吐きたくなるようないやな臭いもします。ただ、それよりもなによりも、クマ少年は村の風景のなかに、強い視線を感じました。空の目とはまた違った眼差(まなざ)しです。

ちょうどその頃、青壁の家の二階から山を見ている少年がいました。こちらはもちろん、人間の少年です。名前はエトといいます。

エトは気持ちの病気にかかってしまい、ここ数年は部屋に閉じこもりがちでした。気持ちのよいときは外でスキップをしたり、学校にも通えるのですが、胸のなかに黒い雲が湧いてきて、雷鳴が轟(とどろ)いたり、体の内側から冷たい雨が降りだすと、ただ一人部屋で耐えるしかなくなるのです。そんなときは、嵐が過ぎ去るのを待つかのように、エトはじっと山を見続けるのです。

今日もエトの心には黒い雲がかかっていました。体の内側でときおり稲妻が走ります。だからエトは風景にしがみつくように山を見ていたのです。すると、「あっ！」と声をあげそうになりました。だれかが僕を見ている。あの山のなかに目があって、僕を見ている。そう感じたからです。

これはエトにとって、世界を変えてしまうほどの大きなできごとでした。エトは部屋に一人でこもっているとき、この世のすべてから切り離されたような感覚に苛(さいな)まれていました。遠い惑星の氷河のかけらにでもなってしまったような気分で、山の風景にしがみついていたのです。それがなんと、山のなかにも目があり、自分を見ていたとは。

晩春の山は、鮮やかな若葉のきらめきに包まれていました。小鳥たちの歓喜の声も聞こえてきます。エトは初めて、山全体の息吹を自身の喜びとして受け止めている自分に気づきました。久しぶりにスキップもしたくなりました。心を覆っていた黒い雲は消えていたのです。

こちらが向こうを見ていて、向こうもこちらを見ている以上、自分と山は不可分の関係だと知ったからです。

エトは喜びのなかで思いました。山の目はどこにあるのだろう。木々の魂のようなものだろうか。それとも、小鳥たちの眼差し？　見られていると感じるのに、目の正体については、まったくわからないのです。

クマ少年はそれから何度も、杉林の斜面までやってきました。人間の村を眺めるためです。自分を見ている目がどこにあるのか知りたいと、毎日強く思っていたのです。

クマ少年は、人間に近づいてはいけないということはなんとなくわかっていました。初めての冬眠があけ、まだ本当に小さなクマの子だった頃、お母さんといっしょに竹林で人間を見かけたのです。そのときのお母さんの怒り方は、クマ少年が目をつぶりたくなるほど激しいものでした。森のミズナラの実がいっせいに爆(は)ぜたかのような表情で、お母さんは吠(ほ)えました。そして、逃げようとする人間を追いかけ、その背中に前脚の一撃をくらわせたのです。人間の着ていたものはびりびりに破れ、血が飛び散りました。お母さんはさらに吠えて、倒れた人間に飛びかかろうとしましたが、クマの子だったクマ少年が悲鳴をあげたことで、動きを止めました。どうしたんだい？　という顔で戻ってきたのです。

クマと人間は相性がわるい。できれば出くわさない方がいい。クマの子だったクマ少年は怒りに駆られたお母さんの行動から、その教訓を得たのです。

しかし今、クマ少年は頭のてっぺんから後ろ脚のつま先まで、人間の村に近づきたいという気持ちでいっぱいのいっぱいになっていました。

自分を見ている目の正体を突き止めれば、自分がいったいナニモノであるのか、その謎さえも解けそうな気がしたからです。

村に入っていくべきかどうか、クマ少年は丸一日悩みました。ねぐらのブナの森には帰らず、杉林の斜面に腹ばいになり、ずっと村を見ていたのです。

すると、夜は村からの視線がなくなることを知りました。自分に向けられていた眼差しが消えてしまうのです。でも、空からの目は見逃してくれませんでした。

太陽が地平に沈めば、星々が司(つかさど)る世界に変わります。やがて、ぼんやり光る雲のような天の川も現れます。目はやはり空のどこかにあり、クマ少年をじっと見下ろすのです。

クマ少年はわけがわからなくなりました。消えてしまう眼差しもあれば、変わらずに自分を見つめる視線もある。それはいったいどういうことなのか？

わけがわからないというのは苦しいことです。考えるクマのポーズをとってじっと動かなかったので、大きな虻(あぶ)にもひっきりなしに刺され、血を吸われました。クマ少年の胸のなか

で、ニガダケの汁を煮詰めたような泡がいくつも弾けます。考えることがこんなにつらいなら、目のありかなど探さず、ブナの森で静かに暮らそうと思いました。

しかし、東の空に薔薇色の光があふれ、村の家々の屋根がまたきらりきらりと輝きだしたとき、眼差しはふいにまた生まれたのです。クマ少年は、もう我慢ができませんでした。

一気に杉林の斜面を駆け下りました。灌木の茂みも体で押し倒し、村はずれの農耕地を体を揺すって横断しました。農道を越え、早起きの人間たちが働いているジャガイモの畑に突っこんだのです。

人間たちは悲鳴をあげたり、怒鳴ったり、クマ少年に石を投げつけてきたりしました。鉄の棒を振りかざしてきた者もいます。なにか硬いものがクマ少年の額に当たりました。クマ少年は吠えました。痛いから吠えたのではありません。「ぼくは、目を探しにきただけだ」と訴えたつもりだったのです。

人間たちは、クマ少年が立ちあがったのを見て、いよいよ血相を変えました。みんな大きな声でわめきたてます。石もどんどん投げてきます。そして突然、そのなかの一人の男がクマ少年に背中を見せて走りだしたのです。

ああ、走らないで！

クマ少年は心のなかで叫びました。クマの目は、動くものに吸い寄せられてしまうのです。

そして、体ごと追いかけてしまうのです。

走らないで！　走らないで！

クマ少年は男を追いかけながら、何度も吠えました。アスファルトの道を越え、公園のブランコに体当たりをし、家々の玄関の前も過ぎ、逃げる男を追いました。

ドンッ！

空気が爆発するような音がして、なにかがクマ少年をかすめて飛んでいきました。クマ少年は脚を止めました。びっくりして、音のした方を振り向きました。

ドンッ！

クマ少年の首をなにかが貫きました。血がどっと噴き出します。クマ少年は仰向(あおむ)けに倒れました。胸の三日月がどんどんまっ赤に染まっていきます。

息ができない。苦しい。

霞(かす)んでいくクマ少年の視界のなかに、青壁の家がありました。クマ少年は自分を見ていたあの眼差しがすぐそばにあることに気づきました。青壁の家の二階の窓から、人間の少年が顔を出し、目をまん丸にしてこちらを見ているのです。

君はだれ？

クマ少年はそう問おうとしましたが、もはや声にはなりませんでした。口のなかに血が溜

まり、どんどんあふれでていきます。
「エト、近づくんじゃない！」
人間の少年が家から飛び出してきたようでした。倒れたクマ少年に近づこうとして、大人たちに羽交い締めにされているのです。彼は胸が波打つほどの勢いで、「ごめんよ、ごめんよ」と繰り返し叫んでいました。
クマ少年の黒水晶の目に、エトと呼ばれた人間の少年の潤んだ眼差しが映りました。
ぼくを見ていたのは……君だったのかい？
薄らいでいく意識のなかで、クマ少年はエトに問いかけました。彼は必死になってなにかを伝えようとしていましたが、もうクマ少年の耳にはなにも聞こえません。でも、その最後の一瞬に、クマ少年はわかったのです。
空の目は、クマとして息絶えていく自分をまだじっと見つめていました。いいえ、そればかりでなく、その目は人間として生まれた少年をも見つめていました。
クマ少年は空を見上げたまま、動かなくなりました。目もあいたままでした。自分を見ている目を、最後まで見届けようとしたのです。

動物哲学物語

確かなリスの不確かさ

ドリアン助川

発　行：集英社インターナショナル（発売：集英社）
定　価：2,000 円 (10％税込)
発売日：2023 年 10 月 26 日
ＩＳＢＮ：978-4-7976-7437-8

ネット書店でのご予約･ご注文は こちらからどうぞ！